

卒業研究 スーパーチルドレン育成法
The excellent standard of bringing up children
1K03A058-1 川越慎也

指導教員 主査 土屋純 先生 副査 関一誠 先生

【命題】

- ① 「運動神経」の良い子供を育てるにはどうすればよいのか。
- ② 正常な「噛み合わせ」の子供を育てるにはどうすればよいのか。

上記 2 点の命題を明らかにすることが目的である。そして、私の考えるスーパーチルドレンとは、上記 2 点の命題を満たした子供たちのことである。

【結論】

しかし、この命題の結論は予め出ている。

- ① 幼少期に様々な運動体験を積ませること。
 - ② 物をよく噛んで食べる習慣を身につけさせること。
- そのため、私は、これらの命題に関連するテーマをいくつか挙げ、考察していくことを主とした。

【経緯】

以下に、まず、上記の命題を考察しようと考えた経緯について述べる。

- ① なぜ、もっと上手くテニスが出来ないのか。これが、私が「運動神経とは一体何なのか？」を考えるきっかけだった。運動神経に自信を持っていた私は、中学生から始めた硬式テニスでつまづいた。
- ② 幼少期から 3 日に 1 度は下痢をしていた私は、18 歳から歯列矯正を行い、噛み合わせを正常に治したことで、その苦痛から開放される。不正咬合が身体に及ぼす悪影響を、身を持って体験した私は「どうすれば正常な噛み合わせが得られたのか」を考えるようになった。

【結論の解説】

次に、命題の結論に対する解説を述べる。

- ① なぜ、幼少期に様々な運動体験を積ませることが、「運動神経」の良い子供を育成するのに重要か。
5 歳頃までに、神経系の成長は約 80%まで進み、12 歳ではほぼ 100%に達するからである。そのため、特にテニスや体操といった、用具を使用する、または、細かい技術を要する競技では、12 歳までに様々な技術を習得することが必須となる。私の在籍していた、日本一の早大庭球部でも、トップの選手は皆、遅くとも 10 歳まで

にはテニスを始めている。

- ② なぜ、物をよく噛んで食べる習慣を身につけさせることが、正常な「噛み合わせ」の子供を育てるのに重要か。

よく噛んで食事をすることで、アゴの発育が促進されるからである。アゴが十分に発達することで、歯がきれいに生え揃うスペースが出来るのだ。そして、まさに私の歯並びが悪くなった一番の要因は、幼少期に物をよく噛んで食べなかったことにある。

【考察】

最後に、命題に関連するテーマに関して考察したことについて述べる。

① 運動神経

A「万能スポーツマン」

野球部員は、総じて運動神経が良い。なぜならば野球は日本で最もメジャーなスポーツであり、運動神経の良い子供たちの多くが掻っ攫われていくからである。

B「没個性」

1+1=2 と、ただ一つの正解をひたすらに求め、団体主義を柱とする日本の教育法からは、個性を持ったストライカーは生まれない。

C「初動負荷理論」

神経と筋肉の合目的的な協調性を高めることで、スポーツのパフォーマンスを飛躍的に向上させることが出来る。イチロー選手や杉山愛選手も取り組む、熱い理論である。

② 噛み合わせ

A「不正咬合」

不正咬合が身体に与える悪影響は、胃腸障害に始まり、めまいや肩こりなど多岐にわたる。

B「審美矯正」

松坂大輔を始め多くの芸能人が行っている審美矯正は、見た目は良くなるが、歯を抜いてしまうため、後々弊害が訪れる可能性がある。

C「後進国、日本」

日本の矯正歯科医療は、非常に遅れている。

D「日本の価値観」

日本人は、歯並びに関して無頓着である。